

[成果情報名] 夏秋キュウリの有機栽培適品種

[要約] 夏秋キュウリの有機栽培に適した品種は、収量性や上物率が高く、病害虫の発生が少ない「光望」「つばさ」「夏すずみ」である。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・赤池一彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 農業技術課、農業大学校

[背景・ねらい]

夏秋キュウリなど収益性の高い果菜類は、有機栽培農家の夏季の主力品目であるが、栽培期間が長く病害虫の被害も受けやすいため安定生産が難しい。

そこで、平坦地における有機栽培に適した夏秋キュウリの品種を選定し、安定生産に向けた栽培技術の一助とする。

[成果の内容・特徴]

1. 夏秋栽培向けの8品種を平坦地（甲斐市：標高315m）で供試し、播種期を変えて2年間試験を行ったところ、次の3品種が適している。

(1) 「光望」（ときわ種苗）

播種期を問わず上物収量が多く、上物率が高い。べと病が若干発生するが、うどんこ病、褐斑病には強く、草勢が強めなことから常時安定した収量を得ることができる。果形の揃いも良い。

(2) 「つばさ」（タキイ種苗）

播種期を問わず上物収量が多く、上物率が高い。いずれの病害に対しても、強い耐病性を持ち、草勢も強めなことから常時安定した収量を得ることができる。果形がやや乱れる。

(3) 「夏すずみ」（タキイ種苗）

播種期を問わず上物収量が多く、上物率が高い。耐病性や草勢は「つばさ」ほど強くないが、常時安定した収量を得ることができる。果形の揃いも良い。

2. 耕種概要（各品種共通）

・栽培時期：2009年 播種6月15日、鉢上げ6/29、定植7/6、収穫7/24～9/16

2010年 播種5月12日、鉢上げ5/25、定植6/7、収穫6/24～8/31

・整枝法：親づる誘引、子づる2節摘心、孫づる1節摘心

・栽植密度：畦幅200cm（床幅80cm）、株間60cm、1条植え、833株/10a

・施肥量：N-P₂O₅-K₂O=25-25-25（kg/10a）、全量基肥

・使用肥料：牛ふんカ^クス^ス堆肥、菜種油粕、発酵鶏ふん、サンライム

・使用資材：育苗培土「有機園芸培土」、鉢上げ「12cmホ^リポ^{ット}」、定植床「白黒ダ^ブル^{マルチ}」

・薬剤散布：未使用（有機JAS適合資材を含む）

[成果の活用上の留意点]

1. 施肥は全量基肥で十分であるが、生育期間中に草勢が弱まった場合には、「有機の液肥」などの液肥資材を補完的に利用する。

[期待される効果]

1. 栽培期間の長い夏秋キュウリの有機栽培における適品種が明らかになることで、安定生産技術の一つとして利用できる。

[具体的データ]

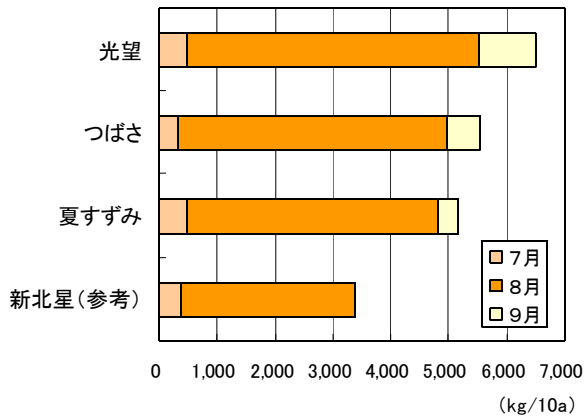


図1 6月播種の月別上物収量(2009年)

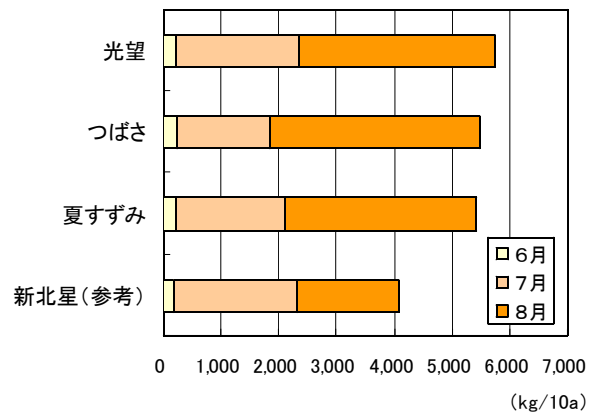


図2 5月播種の月別上物収量(2010年)

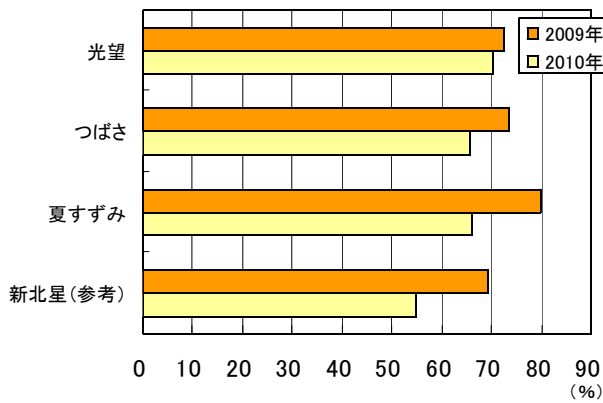


図3 品種の違いによるキュウリの上物率

・上物率は総収量に対する本数割合。
上物果：1本80～150gで、傷がなく、曲がりか2cm以内のもの。

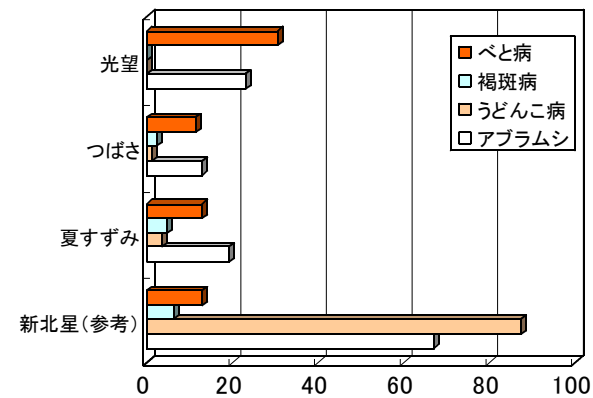


図4 6月播種の病害虫による被害度(2009年)

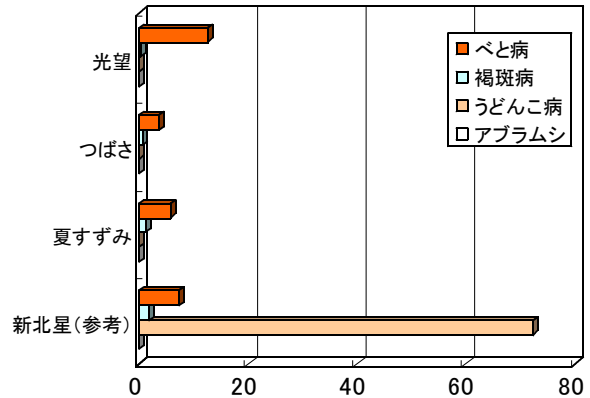


図5 5月播種の病害虫による被害度(2010年)

[その他]

研究課題名：果菜類の有機栽培実証と有機栽培土壌の改善
 予算区分：県単(重点化)
 研究期間：2010～2012年度
 研究担当者：赤池一彦、小澤明子、石川寛人、對木啓介